

## 直示詞の機能と意味(その1)

### ー フッサール『論理学研究』第一研究の根本的問題点 ー

宮原 勇

#### 1. 「意味のイデア的同一性」について

『論理学研究』における意味論上の根本的問題点の第一は、「意味」の「イデア的同一性」を、「スペチエス」のイデア的同一性をモデルとした点であるが、これに関しては、すでに旧著『現象学の再構築』(1988年、理想社)p.181-185で詳しく検討してあるので、ここでは改めて詳しくは立ち入らない。

この「意味のイデア性」、ないしは「意味の厳密なる同一性」に関しては、フッサール後の展開では、「家族的類似性」に関するウィトゲンシュタインの議論の影響により、「意味」に対応する普遍概念自体、厳密な同一性を持つものではなく、精々のところ、緩やかな「類似性」を持つに過ぎない、それはちょうど家族の一員たちが互いに似ている程度に互いが似ているに過ぎないという認識が広まった。それが原因で、フッサールの「意味のイデア的同一性」の主張は、そのまま受け入れがたい状況になってきた。

しかし、近年事情は変わってきた。言語研究の分野での変転が生じたのである。その「家族的類似性」の議論は一部の認知言語学者にポジティブに利用されて、特にそれは古典的カテゴリー論への批判として引き合いに出されているのではあるが、しかし、そのような形で古典的カテゴリー論の欠点を指摘することで新たにカテゴリー論が展開されるに至っている。それは、言語学の立場からの<カテゴリー生成>に関する理論である。つまり広義のカテゴリー化の問題が再び語られるようになってきているのである<sup>1)</sup>。

##### 1-1. 「意味のイデア性」に至るフレーゲとフッサールの違い

###### (1) 「伝達可能性」を保証するもの——フレーゲの場合

本論文では、フッサールの理論を同時代の論理学者フレーゲの理論と対比させて、その特徴を明確にしたい。そこでまずは、フレーゲ「思想」(*Der Gedanke. Eine Logische Untersuchung*, 1918-1919.<sup>2)</sup>)における議論を検討することにしよう。

まず、フレーゲにおける *Sinn* と *Bedeutung* の区別を前提にして、それを「文」(*Satz*)に当てはめると次のようになるという。

「思想は、文の意味である」(Der Gedanke ist der Sinn eines Satzes)

それは同時にこうも定式化される。すなわち、

「文は思想を表現する」(Der Satz drücke einen Gedanken aus.)

この「思想」とは、通常理解されるようなわれわれの意識の中にある表象ではなく、非感性的なもので、誰の所有物でもない。そして、普遍的なものとされる。誰々の意識内容というのではなく、その所有者は誰でもないものという意味での「普遍」なのである。それでは、どうしてそのような奇妙なものを考え出したのであろうか。言い換えると、なぜそのような考えに至らざるを得なかったのだろうか。この点をまずは明らかにしておきたい。

まず指摘しておきたいのは、フレーゲは文の意味を考えるとときに、それは複数主観同士の「伝達」(Mitteilung)を考えているということである。それはまさに **Kommunikation** ということであるが、それは文字通り「共通なもの」、「同一なもの」のやりとりでなければならないのである。そうすると、文の送り手と受け手で、なんらかの「共通なもの」、それも学問的言明の場面のよう、「厳密に」同一でなければならない。伝達が始まるに際して、送り手が持っていて、伝達後には受け手のものになるものとはいかなるものなのだろうか。

まず可能性としては、外的事物か内的な意識内容かのどちらかの可能性を考える。外的事物、ないしは出来事が全く同一なものとして「伝達される」というのは、そもそもそのような存在形態からいって、不可能であるといわねばならない。木や石や家は、自分で見ることができるし、手で触れることができる。勿論、われわれは他の者もそういったものを見、触れることができると考えている。言語による「伝達」とは、もちろん実際に石ころを他の者に手渡しすることとは、根本的に違っている。それとは全く違った存在形態のものの伝達でなければならない。もし、文が指し示しているものが外的事物だとしても、一度言語の送り手によって認識されていなければならず、見るか、あるいは触るかといった感覚を通じて内面の「表象」となっていなければならぬ。それでは、言語的伝達で受け渡しされるのは、そのような「表象」なのであろうか。

表象とは、そもそも誰かが所有する内的状態に過ぎない。複数の者が同一の表象を共有することはできない。つまり、各々の主観が自分のみで持ちうるものなので、伝達可能な文の意味内容であることは出来ない。そこでフレーゲは、コミュニケーションにおいて複数主観間で伝達可能な内容として、「第三の領域」を考える。それを「思考」と呼んだのである。しかも、彼の念頭に強くあったのは科学の理論などの普遍的な内容を表現した文であった。特に学問的議論といった形態のコミュニ

ケーションにおいて「伝達可能性」を保証するものとして、「イデア的」(フッサール)な「思想」を考えざるをえなかったのである。

しかし、この「思想」という用語は、さも主観的意識内であるかのように誤解されやすい表現ではある。本来は、それ自身、中立的存在形態である「命題」(proposition)そのものとも呼ぶべきものである。

ここで確認しておきたいのは、フレーゲは、まず「科学の成立可能性」を考え、それには<科学的言明が伝達可能でなければならない>、さらに、<言語的伝達では、まさに何らかの同一物の伝達が生じている>、そのような意味での同一物は存在様態としては「普遍者」以外考えられない、という道筋であったといえよう。言語を媒介とした「伝達」の場面で「意味のイデア性」にたどりついたといえるのである。これは、次に見るように「伝達」の要素を言語から排除することによって「イデア性」にたどり着こうとしたフッサールとは大きく異なる点である。

## (2) 「孤独なる心的生活」における「意味作用」と「イデア的同一性」——フッサールの場合

以上のフレーゲの議論に対応するものは、フッサールでは第 1 研究の第 1 章第 7 節から第 8 節にかけての議論に見られる。まずそれに先立つ第 6 節では、それまでの議論のまとめとして言語表現にまつわる要素を次のように分析する。

まず、「言語表現」を成立させている要素として、(1)その物理的側面と、(2)その物理的表現に「意味」を与える「心的体験」とを区別する。また、「名辞」に関して、次の三つの作用を区別する。すなわち、(a)「告知作用」(kundgeben) (心的体験を告知する働き)、(b)「意味作用」(bedeuten)(意味を与える働き)、(c)「指示作用」(anzeigen)(対象を指示する働き)の三つである。以上の区別をした上で、次のように述べる。

「すべての表現がコミュニケーション的会話においては指標(Anzeichen)としての機能を果たしている。」

「すべての表現は聞き手にとっては、話し手の『思想』を、すなわち話し手の意味付与的体験を表す記号としても、また伝達する志向(Intention)に属するそれ以外の心的体験を表す記号としても役立つ。」

「このような言語表現の機能を、『告知機能』(die kundgebende Funktion)と呼ぼう。」

この「告知」とは、発話者の内面を表出する働きで、その都度の意識内容に依存する。それは、広義の「指示」作用のひとつといってよい。そうすると、「コミュ

ニケーション機能は本質的に、表現が指標(*Anzeichen*)の働きをするという点に基づいている」といってよいだろう。

そこで、フッサールは、「しかし」と続けて、こう言っている。

「他者とコミュニケーションを交わして、[告知という仕方]で自分自身を伝達する必要のないような[一人だけのモノローグ的な]心的生活においても、表現には大きな役割が与えられている」と。

つまり、意識の外部にある対象や出来事を「指示する」ことも、モノローグの場合だけであれば、必要はないのである。また、自分の内面の表出も敢えてする必要はない。つまり、「指示」や「告知」という様子がエポケーされた状態なのである。第一節で、すでに「表現は、それらがもはや指標としての機能を果たしていない孤独な心的生活においても、その意味機能(*Bedeutungsfunktion*)を発揮するのである」と述べている。つまり、そのようなエポケーの後に「意味機能」が現象学的残余として、析出されるのである。

言い換えると、「コミュニケーション」の場面から「孤独な心的生活」の状況へと転換することで、言語表現の「指示機能」の捨象を行い、純粋な「意味機能」のみを取り出すのである。フレーゲの場合には、言語表現によってまさに表現されている「意味内容」は、<複数主観によって共有されうるものであるから本質的に普遍的性格を持たねばならない>と考えたが、フッサールの場合、事情が大きくことなる。彼によれば、同一主観によってであれ、複数主観によってであれ、同一の言語表現に対して、意味付与作用を幾度であっても遂行しうるものであり、それにもかかわらず「同一の意味内容」が理解されうるものでなければならない。心的体験が時間とともに変転し、同じではないにもかかわらず、そこで把握される「意味内容」は同一でなければならないというわけである。言語行為にかかわる主観が複数であっても、単一であっても、本質的には事態は変わらない。ということは、単一なる言語使用者の場合であっても、妥当する理論でなければならないのである。単一なる言語使用者の場合、そのつどの心的体験が個別事例であり、それらの個別的意識体験の変転を貫く同一なる「意味」内容が同一なる普遍者として措定されるのである。言い換えれば、心的体験としての「意味付与作用」の多様性に対して、「意味」そのもの「同一性」が際だたされる。それはちょうど、スペチエスと同様な「イデア性」を持つことになるのである。

「孤独なる心的生活」における言語使用に際しては、外的事物を指示する働き、

これは名辞の場合には「名指す」といわれるが、そのような働きや、発話者の内的な体験を「告知」する働きは、本質的役割を果たさない。それらは、ともに広義の「指示機能」である。「孤独なる心的生活」において語られる言明の具体例としてフッサールが挙げているのは、「三角形の三つの垂線は一点で交わる」などの命題である。このような例においては、発話者の心的内容がことさら告知されているわけでもなく、また特定の事物が指示されているわけでもない。

フッサールでは、<言語表現>・<意味[=イデア的内容]>・<表象[=心的内容]>・<指示対象>という構造が考えられている。「意味」をイデア的内容として考えたのは、フレーゲの場合と同様に、文といった言語表現でまさに「表現」されているのは主観的表象でもなく、外的対象でもないからなのである。そこでフレーゲは、「思想」(Gedanke)という誤解の生じやすい用語を使用した。フッサールの立場からは、「イデアの対象」、ないしはひとつのイデア的事態をも意味しうる「イデア的对象性」という表現も可能であろう。つまり、対象の側に「イデア性」を持っていくのである。普遍-実在論の立場である。それは、用語は違っていてもフレーゲと共通な立場といってよい。

フッサールが言語使用の場面を「孤独な心的生活」という、言語使用にとってはいささか特異的な状況に限定して言語機能を分析したということは、いわば唯名論的な個体主義を払拭しようとしたからであるといつてよい。そのような個体的側面の排除によって、ポジティブな普遍的領野が開かれたのである。

フッサールもフレーゲも「意味」のイデア性/普遍性を析出させる際には、特に「個体的な表現」である「指示詞」、言い換えれば「偶因的な」表現が排除されるという過程を経る。

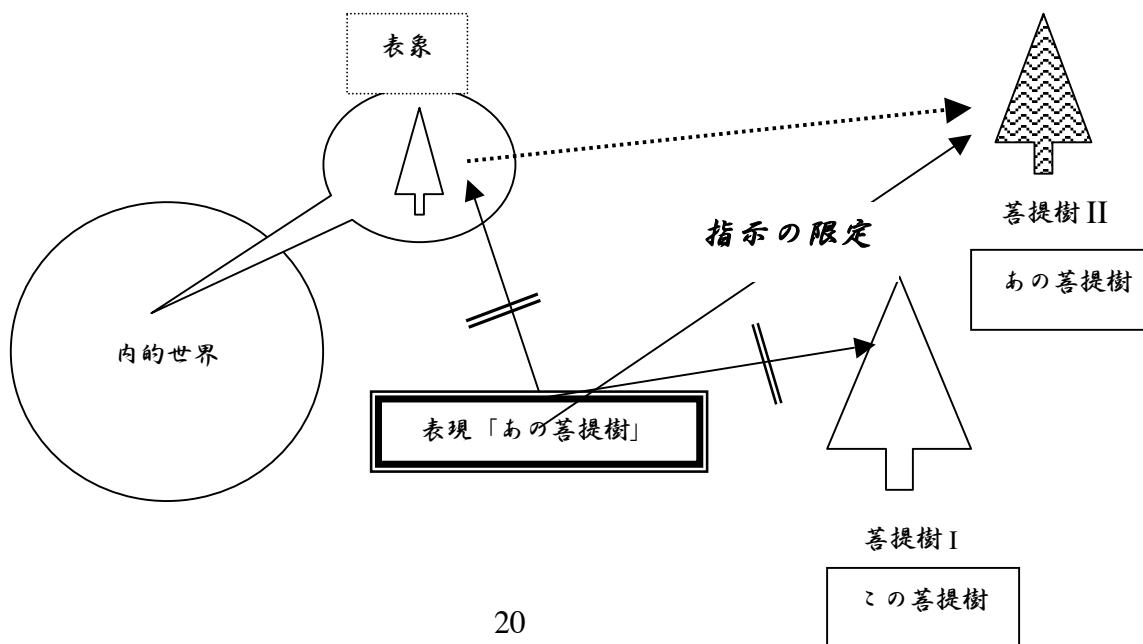
## 2. 「語義の動揺」と「偶因性の排除」

### (1) 偶因的な直示性の排除——フレーゲの議論——

フレーゲは、「今日」「ここ」「そこ」「わたし」といった表現の理解に際しては、そのような単語によって表現されている以上のことを知らないと、それを使用した文の理解は成り立たないという。「今日」という言葉が使用された翌日には、それが昨日のことを意味しているということを知らないと理解はできない。そのような指示詞を含む表現は、もちろん発話行為依存的な直示性(deixis)を持つものであるから、その理解には発話の状況に関する情報が含意されているとも言えるし、その理解にはそのような状況の知識が必要であるともいえる。フレーゲの用語でいえ

ば、直示的表現が使用されている文では、それが表現しようとしている「思想」を完全には表現し切れていない、その完全な理解には、例えば誰が発話者なのか、いつその発話がなされたのか、どこでなされたのかといったことの情報を必要とする。つまり、

ということになる。これは、「私」という表現の場合も当然のことながら事情は同じである。「私」という指示詞の使用に際しては、「この瞬間に君に話しかけている者」という意味(Sinn)で理解されるのだが、実際はそのつど誰であるか規定されているはずである。



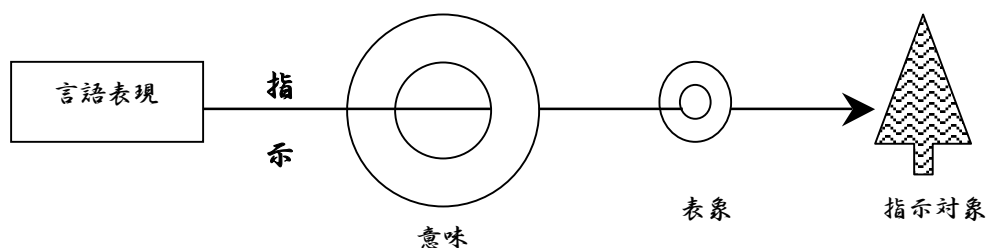
のを、私はこの表現(「あの菩提樹」)によって指示するつもりなのである」と述べていることから窺える。実際にわれわれが指示的表現を使用するときには、まさにその「指示対象」を指示しているのであろう。確かに、私の感じている「この痛み」といった場合のように、指示対象が自分の内的意識に属する場合もあるが、外的事物の場合などは、例えば実際の菩提樹を指し示しているのであり、それを見ている私の、その「表象」を指しているのではない。

「あの菩提樹」といった指示表現の場合では、前頁の図のような関係になっている。

このような事態の場合、表現「あの菩提樹」の指示の方向が、「菩提樹Ⅰ」ではなく、「菩提樹Ⅱ」であると規定しているのは何なのか。

フレーゲでは、特に彼のいう「固有名」に関して、<言語表現・意味・指示対象>の区別がなされていた<sup>3</sup>。この三項関係は、言語表現が指示対象を限定する際に「意味」が媒介することを表現しているといってもよい。

しかし、そのみならず、発話者の主観に属する「表象」こそ、指示の方向性を限定する役割を担うといってもよい。つまり、次のようになっている。



基本的に、「指示関係」、言い換えれば<発話行為依存的な直示性>は、そのつどの発話者の「表象」に規定されている。つまり、言語表現の指示関係は、確かにその言語表現の概念的規定である普遍的で客観的「意味」内容によって、「ある程度は」限定されているとはいえ、最終的には具体的「イメージ」である「表象」によりさらに個別化され限定されて、初めてその方向性が確定されるといってもよい。しかも、その「表象」とは、フレーゲのいうようにただ一人の「担い手」を持つに過ぎず、客観的な属性を持つものではない。永続的な「像」ではなく、内的世界の中に浮かんで来ては消える主観的像なのである。それは、人と人との間に伝達されるものではない。

逆に言えば、外的事物に関する言明の場合、指示関係を厳密にしようとすれば、

実物を手渡せばよいのである。言語コミュニケーションの本質は、むしろ「指示」の未規定性、遊動性にこそあるといってよい。それには絶えず人間の認知機構が介在していて、初めて「指示」という現象が可能となるという事情をここで確認しておかねばならない。

さて、以上の議論を前提として、次の問を検討することにしよう。すなわち、指示的表現を含む文が、その「意味」としていかなる思想を表現するのか、である。すでに述べたように、フレーゲが伝達可能な同一の意味内容、つまり「思想」を持ちうる文の例として挙げるのは、ピタゴラスの定理のような数学的命題であった。それは、無時間性(*Zeitlosigkeit*)を意味する「現在時称」で表現された命題でなければならないからである。例えば、「この木は緑の葉をつけている」(*Dieser Baum ist grün belaubt.*)という文は、この現在時称が何時のことを指すのかが明確でない限り、その意味、つまり「思想」を持ち得ないという。時間的指示関係が限定されないという意味では、「この」という指示詞も限定されていなければならない。

以上のフレーゲの見解に対して、われわれはどう考えるべきであろうか。

指示関係が限定されない文の中には、ある特定の時間にある個物、ないしはある個別的出来事を述べる文はすべて、それに入ることになる。しかし、われわれは「この木は緑の葉をつけている」とか、「私はけがをした」(*Ich bin verwundet worden.*)に関して、いったい何を理解しているのであろうか。そこには他者に伝達できる意味内容は含まれていないのであろうか。そもそもフレーゲは、「意味」を指示関係から分離させたのだった。つまり、「意味」は指示関係が限定されなくとも、それだけで成立するものであるのではないだろうか。指示関係が動揺する文や句は「意味」を持ち得ないというのは、ある種の矛盾を含んでいると思われる。

実は、フレーゲと同様にフッサールも、意味のイデア性を主張する際に、「直示性」の排除を行うのである。その場合も、ある種の矛盾、ないしは混同を犯していると思われる。そこで、フッサールの議論を検討することにしよう。

(以下、「その2」に続く)

---

<sup>1</sup> そもそも問題はウィトゲンシュタインの「家族的類似性」をめぐる議論自体、どれだけの有効性をもつものなのか検討する必要があるのである。結局、ヒューム流の唯名論的立場からの理論、つまり<一般名辞・その当の外延に属する各指示対象間の類似性・心理的な「連合」作用>以外に「普遍者」を考えない立場が、果たして論理的に支持されうるのかが問題である。特に「同一性」を「類似性」に解消してしまうことの問題点をすでに次の論文で指摘しておいた。「類似性とカテゴリーー認知言語学での『カテゴリー化』の理論とその批判的検討ー」関西哲学会年報『アルケー』No.8 2000年参照。

---

<sup>2</sup> Gottlob Frege, Logische Untersuchungen, Erster Teil: Der Gedanke, in: *Beiträge zur Philosophie des deutschen Idealismus*. I. Band (1918/19), S.58-77, [*Kleine Schriften*, hrsg. von Ignacio Angelelli, 1967, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, SS.342-362]

<sup>3</sup> 彼のいう「固有名」とは指示対象が一義的に限定されうるものを指すので、基本的には「あの菩提樹」のような表現にも当てはまる。